

特別支援教育実践研究会 第7回実践研究発表会

開催日時：平成30年12月16日(日) 15：25～17：00

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

特別支援教育に関する情報の共有と発信を図ることを目的として、特別支援教育実践研究会を設立し、会員が教育課程編成や学校現場・センター等における指導実践とその成果等を発表する場として、第7回実践研究発表会を開催した。11件のポスター形式による発表が行われ、本学院生・新潟県内外の小・中学校、特別支援学校教員等58名が参加した。

発表要旨

発表1

題目：健康教育に関する『地域連携コモンズ』形成の試み

発表者：大庭重治¹・笠原芳隆¹・八島猛¹・佐藤将朗¹・増井晃¹・上野光博¹・野口孝則¹・留目宏美¹・池川茂樹¹・境原三津夫²・平澤則子²・高柳智子²・中島通子²・大久保明子²・永吉雅人²・渡辺弘²・加藤喜美江³・猪又智子³・室橋由貴³・足田真智子⁴・大日向仁代⁵（上越教育大学¹・新潟県立看護大学²・上越教育大学附属学校園³・新潟県立高田特別支援学校⁴・上越市教育委員会⁵）

要旨：小中学校の学級には、特有の身体特性のある子ども（肢体不自由、弱視等）、アレルギーのある子ども（食物、動物、化学物質、アトピー等）、服薬に伴う副作用（眠気、食欲不振等）に対する配慮が必要な子ども（病弱児、発達障害児等）など、健康管理に特別な配慮が必要な子どもが数多く在籍している。本報告では、このような子どもたちを担当する教師を支援することを目的に開始した研究プロジェクトの内容について紹介する。このプロジェクトは、上越地域において活躍するこれらの領域の専門家による研究者集団を形成し、連携協定締結大学、附属学校園、地域の学校及び教育委員会の密接な連携に基づく活動を通して、健康管理に特別な配慮を必要とする子どもを担当している学級担任や養護教諭を支援するための「地域連携コモンズ」の形成を試みることを目的としている。

発表2

題目：書字を苦手とする児童への支援方法について（4）～漢字テストに焦点を当てて～

発表者：井上和紀（新潟市立漆山小学校）

要旨：書字を苦手とする小学生に対し、漢字を書くことを通してその苦手意識を払拭させようとする試みである。昨年度、小学4年生を対象に1回20問の漢字テストを行った。同時に練習のためのワークシートを用意した。これはテストする漢字を例示し、色を薄くしたなぞるための文字を示したものである。これを用いて部首やつくりを思い出させる声かけをしたところ、そ

れを手がかりに思い出して書こうとする姿が見られるようになり漢字テストの結果が向上した。今年度は小学2年生を対象に、同じシステムで漢字テストを行った。ただし1回の問題数を5問に減らした。これにより、少し頑張れば100点が取れる状況になり、見通しが持てるようになった。また、100点を取って大喜びする姿が見られ、次への意欲づけにつながった。

発表3

題目：知的障害を伴うASD児の主体的・対話的な学びを促す支援方法

発表者：高木梨子・庄司智美・和田智秀・佐藤昌史・池田吉史（上越教育大学）

要旨：特別支援学校小学部に在籍する知的障害を伴うASD児2名を対象として取り組んでいる主体的・対話的な学びを促す支援方法について実践報告を行う。本実践は、個別活動と小集団活動の2つで構成されている。小集団活動では、サーキットやボール遊び等を通して、自発的な取り組みや他者とのコミュニケーションを促すことを目指している。個別活動では、小集団活動に必要な個別のニーズに応じたスキルの形成を図っている。本発表では、これまでの成果と今後の課題を整理することを目的とする。

発表4

題目：発達障害特性の高い児童の主体的・対話的な学びを促す支援方法

発表者：笹川美智・佐脇由佳子・堀井優希・近藤昌樹・池田吉史（上越教育大学）

要旨：発達障害特性の高い児童3名を対象として取り組んでいる主体的・対話的な学びを促す支援方法について実践報告を行う。本実践は、個別活動と小集団活動の2つで構成されている。小集団活動では、ミュージックベルなどの活動を通して、ルール遵守や他者との意見交換などの集団活動スキルを促すことを目指している。個別活動では、小集団活動に必要な個別のニーズに応じたスキルの形成を図っている。本発表では、これまでの成果と今後の課題を整理することを目的とする。

発表5

題目：附属学校と連携した特別な教育的ニーズのある子の学習支援プログラムの開発（1）

発表者：池田吉史¹・笹川美智¹・庄司智美¹・高木梨子¹・和田智秀¹・佐藤昌史¹・堀井優希¹・笠原芳隆¹・藤井和子¹・岩崎 浩^{1,2}・松岡博志²・青木弘明²・石口昇²・中林直哉²（上越教育大学大学院¹・上越教育大学附属小学校²）

要旨：附属小学校と連携して、小学校の通常の学級に在籍している特別な教育的ニーズのある子どもの学習支援プログラムを開発することを目的とした研究の進捗について報告をする。附属小学校に在籍する学習面、社会面、生活面に特別な教育的ニーズのある児童数名を対

象として、国語・算数などの教科学習、コミュニケーション、ソーシャルスキル、自己管理などの内容について支援を行っている。対象児の支援を、R) ニーズの把握、R) アセスメント、P) 支援計画作成、D) 支援の実施、C) 支援の評価というRPDCAサイクルに基づいて実施している。本発表では、これまでの成果と今後の課題を整理することを目的とする。

発表6

題 目：学習障害児の学習意欲に配慮した漢字指導に関する事例的研究

発表者：野口真衣・永井桃代・菱拓夢・福田幸久・黒川健太郎・早瀬雄太・鈴木地平・山本和希・八島猛（上越教育大学）

要 旨：読み書きの能力は、すべての教科学習の基礎であり、そのつまずきは、学習活動全般に影響を及ぼし、副次的に学習意欲を低下させる。そのことが学習遅延や学力低下の要因となっている。そこで本研究では、漢字の読み書きに困難を示す学習障害のある1生徒に対して、学習意欲に配慮した漢字指導を行い、その効果を漢字の読み書きの習得度と漢字学習に対する動機づけの観点から検証した。その結果、漢字の読み書きの習得度、漢字学習に対する動機づけが共に向上した。

発表7

題 目：読みの流暢性に困難を示す1児童を対象とした支援方法の検討

発表者：福田幸久・菱拓夢・永井桃代・黒川健太郎・野口真衣・早瀬雄太・山本和希・鈴木地平・八島猛（上越教育大学）

要 旨：読みの流暢性に関する指導は、学級単位で行われる多層指導モデルのMIMやランダムに羅列された文字列から指定された単語を見つけ出す単語検索課題、3モーラから成る単語の第1モーラと第3モーラを統合する音韻統合課題などがある。特殊音節は、日本語の基本的な特徴である1文字1音節に反したもので、障害の有無にかかわらず習得が難しいとされている。そこで本研究では、全般的に知的な遅れはないものの、読みの流暢性に困難を示す1児童を対象に、読みの流暢性を高める支援を行った。その結果、読みの流暢性が高まり、読解力も向上したことが明らかとなった。

発表8

題 目：漢字の書字に困難を示す児童を対象とした漢字属性に応じた指導に関する事例研究

発表者：永井桃代・福田幸久・早瀬雄太・菱拓夢・黒川健太郎・野口真衣・鈴木地平・山本和希・八島猛（上越教育大学）

要 旨：漢字の習得を促進する要因として、従来、対象児の認知特性に応じた指導の有効性が示されている。また、漢字の画数や使用頻度の高さなどの漢字属性への配慮が認知機能障害のある子供に対する指導に有効である

との指摘がある。しかしながら、漢字属性に配慮した指導の効果は実証的に検討されていない。そこで本研究では、漢字の書字に困難を示す1児童を対象として、認知特性と漢字属性に注目した書字指導を実施した。その結果、学年相当の漢字の習得に改善が見られた。また、漢字属性の観点から、画数の多い漢字は習得が困難であることが示された。

発表9

題 目：神経線維種症1型の1生徒に対する学習指導の効果

発表者：八島猛・福田幸久・永井桃代・野口真衣・菱拓夢・早瀬雄太・黒川健太郎・鈴木地平・山本和希（上越教育大学）

要 旨：認知機能障害の併存率が高い慢性身体疾患の存在が明らかにされつつある。神経線維種症1型（NF1）はカフェ・オ・レ斑、神経線維腫という皮膚の病変を主徴とする遺伝性の疾患である。一般集団と比較して視覚認知障害、注意障害、実行機能障害、学習障害の併存率が顕著に高く、最近では学習遅延を中心とする学習場面での不適応が報告されている。本研究では、NF1の1生徒に対してアセスメントに基づく数学の学習指導を行い、その効果をHarterの動機づけ要因のモデルに基づいて検証した。その結果、家庭学習の持続性、学業成績、自己評価に改善がみられた。慢性疾患の子供を対象とする学習指導に際して、疾患の主徴はもとより、認知機能と動機づけに対するアセスメントの有効性が示唆された。

発表10

題 目：視覚・重複障害児の触察による美術鑑賞に関する試行的検討

発表者：佐藤将朗・佐藤懸斗・佐久間晶子（上越教育大学）

要 旨：本研究では2名の視覚・知的重複障害児に対して、大きさと装飾の有無を反映した模擬美術作品を提示し、各作品を触察で鑑賞する様子をVTR撮影により試行的に分析した。視覚障害の程度に関係なく、触運動量の少ない作品は、作品判断後の触察時間が増加していた。また、触運動量の中程度の作品と多い作品は、全盲児で作品判断前後の触察時間が等しく長いか、作品判断時間が長く作品判断後の触察時間は短かった。一方、弱視児はほとんどの作品判断後の触察時間が増加していた。対象児の触運動の種類については、全盲児で触運動量の少ない作品と中程度の作品で作品判断後に協調的な触察が行われていたが、触運動量の多い作品では、作品判断後に協調的な触察は行われていなかった。一方、弱視児は全ての作品判断後に協調的な触察が行われていた。これらの結果と質問への回答から、視覚・知的重複障害児の触察による美術鑑賞を通じた思考の高次化について議論した。

発表11

題 目：聴覚障害児の物語文読解方略に関する一考察－眼球運動計測の分析を通して－

発表者：坂口嘉菜（上越教育大学）

要 旨：国語科教科書の物語文教材は、物語文だけでなく、ストーリーと関連する具体的イラスト、ストーリーと関連しない抽象的イラスト、図、語彙の注釈、読み課題の呈示など、連続型テキストと非連続型テキストを織り交ぜた混成型テキストとなっている。教科書使用においては、連続型・非連続型テキストの相互の関連付けや参照の仕方など、複雑な認知活動の展開が前提とされているが、聴覚障害児が教科書をどのような方略を用いて読み進めているのかは明らかにされていない。そこで本研究では聴覚障害児を対象とし、教科書を使用した物語文の読解方略について、理解度テスト及び眼球運動計測を通して明らかにすることとした。経過報告として、7名の児童に関するデータをもとに研究の結果・考察を報告した。